

科学英語のエスノグラフィー：日本における大学院 生向け科学コミュニケーション授業の開発のために

田村，美香

<https://doi.org/10.15017/1654608>

出版情報：Kyushu University, 2015, 博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：Fulltext available.



氏名	田村 美香			
論文名	Ethnography of Scientific English: Towards the Development of a Curriculum of Scientific Communication for Graduate Students in Japan (科学英語のエスノグラフィー ―日本における大学院生向け科学コミュニケーションカリキュラムの開発のために―)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	井上 奈良彦
	副査	九州大学	准教授	志水 俊広
	副査	九州大学	教授	小谷 耕二
	副査	九州大学	准教授	Andrew Hall
	副査	関西大学	教授	Fred Einar Anderson

論文審査の結果の要旨

科学コミュニケーションにおける国際共通言語としての英語の地位は揺るぎないものとなっており、関連する研究も数多く行われている。しかしながら、日本の理系大学院学生を対象とした英語コミュニケーションの研究は、これまでのところ限定的である。本論文では、まず、日本の高等教育機関における特定目的のための英語（ESP）に焦点を当て、現状の概観として、ESP研究の背景・定義・下位分類・実践への応用などを文献に基づいて行い、特に日本の大学の代表的なESPプログラム（早稲田大学と東京大学）を比較している。さらに、本論文は、理工系の大学院を特異な文化を有する共同体と捉えて行った次の4つの民族誌的研究が中心となっている。すなわち、(1) 学生の英語学習に対する態度と英語教育のニーズ、(2) 英語による化学分野の講義における学生の沈黙、(3) 「海外武者修行」と称されるアメリカへの短期留学プログラムの有効性、(4) 理系のライティングを指導するオンライン授業の開発過程での問題点、である。最後に、この研究からの知見に基づき、カリキュラム開発において重要となる点について、理工学分野における大学院生と大学教員双方に、また、英語教員にとっても、それぞれ有益となるように考察を加えている。

論文は7章からなり、第1章序論は研究の背景、目的、方法論、研究の範囲と限界、研究の意義、論文構成などについて紹介している。

第2章は、先行研究に基づき、ESPの歴史的背景、ESPの定義・種類・実践方法などを概観し、日本の高等教育におけるESPプログラムの例として早稲田大学の理工学術院英語教育センター（CELESE）および東京大学の理系学部1年生対象のライティングプログラム（ALESS）を取り上げている。

第3章では、質問紙とフォーカスグループインタビューを用いて、研究志向の総合大学のプログラムにおいて、理系大学院生が抱く英語学習に対する態度とESP教育の必要性について調査し、学生の視点からの考察を加えたものである。

第4章では、アメリカ人訪問教授による化学分野の講義において、授業観察とインフォーマルなグループインタビューを通じて日本人大学院生の沈黙について調査した。日本人学生とアメリカ人教授の授業中のコミュニケーション、特に沈黙に対する解釈の違いなどを明らかにしている。

第5章では、日本人理工系大学院生のカリフォルニアにおける短期語学研修と地元企業訪問などを組み合わせたプログラムにおいて、学生が書いた事前の参加目的文書と現地でのインタビューをデータとして学生の意識や態度を分析している。

第6章では、理系大学院生向けオンラインのライティング科目において、その有効性と運用に影響を及ぼした要素を考察している。

第7章は結論として、本論文で報告した研究の成果を要約し、日本の大学院における科学英語コミュニケーションカリキュラムの開発への示唆を提示するものである。

以上のように、日本の理系大学院生を対象とした詳細な質的研究はまだ限られており、本論文は英語教育学分野への重要な貢献となるものである。社会的には、日本人学生の国際的な活動のための英語力強化方法は様々な試みがなされている段階であり、本論文の具体的な分析に基づく示唆は、今後のカリキュラム開発に大きく資するものである。よって、論文調査委員会は、博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。